

蒼井村正

表紙イラスト…或十せねか



試し読み版

二次元ぶち文庫

カーズイーター

呪詛喰らい師外伝 後編

魔犬跳梁

※本作はあとみっく文庫『呪詛喰らい師①～③』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただきますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



カースイーター
呪詛喰らい師外伝 後編
魔犬跳梁

蒼井村正
表紙 / 或十せねか

登場人物紹介

Characters

ときわぎさき

常磐城咲妃

「呪詛喰らい師」^{カースイーター}という異名を持つ少女。幼いころから退魔師としての修業を積んでおり、淫神を自身の身体に封じる使命を帯びている。封じた淫神の力は使うことが可能。

「んあ！ あつアツアツはうううんッ！」

むせ返るような獣臭と、甘酸っぱく疊惑的な少女の淫臭に満たされた室内に、悩ましげにかすれた嬌声きょうせいが響く。

呪詛カーズイター喰らい師の異名を持つ退魔少女、常磐城咲妃ときわぎさきは、延々と犯され続けていた。

体液でドロドロになったベッドの上で、仰向けに組み敷かれた咲妃に毛深い巨体をのしかからせ、激しく腰を使っているのは、三本の首と三本のペニスを持つ魔犬、ケルベロスの姿をした荒ぶる淫神みみたらがみだ。

学園の女子寮を自らの領域と定め、寮生たちの身体に唾液の結界を塗り込めて、歪んだ守護欲を満たしていた犬神である。

女子たちに淫らな行為を仕掛け、縄張りを侵して挑発した咲妃に怒り狂った犬神は、憤怒のパワーを獣欲に変換し、神伽かみとぎの巫女を徹底的に犯し抜いているのだ。

ジユプッ、ズププッ、グチュグチュグチュルッ……。

堪らない淫音を立てて、膣口と肛門を凶暴な形状のペニスがストロークし、三本目の巨根がクリトリスをなぎ倒し擦り責めて翳なぶる。

「ふあ！ アッ、はンッ！ んくうううんッ！」

全身の性感を燃え上がらせる神気をまとわせた巨根が注挿される度に、咲妃は抑えきれぬ女悦の声を上げ、革帯ボンデージに縛められた極上の裸身を痙攣けいれんさせた。

肉感と躍動感を併せ持った美脚が、巨犬の胴に絡むかのように宙を蹴り、スリムに引き締まった下腹が、膣内を搔き回し鬨る獣根に突き上げられて、ポコッ、ポコッ、と痛々しくもエロチックに盛り上がる。

「コレダメ犯シテモ、初々シイ締メツケヲ失ワヌトハ見上ゲタモノヨ。子宮ノ結界モ解ケヌカ？」

容赦のない腰使いで女体を責め抜きながら、二つ首の大神は忌々しげに牙を剥き出し、さらに激しく呪詛カクスイター喰らい師を犯した。

コブだらけの亀頭冠が、膣と直腸の繊細な粘膜をゾリゾリと搔き鬨って奥の奥まで突き挿れられ、子宮と腸壁を執拗にこね回す。

巨根の肉胴に密生した剛毛は、痛々しい程に勃起ぼつきしたクリトリスを情け容赦なくなぎ倒し、押し潰さんばかりに捻ひねり転がして、荒々しくブラッシング責めを仕掛けていた。

「ふはんっ！　ンッ、くあ、ああああうううんっ！　また、また、イクッ！　イクんううううーンンンッ!!」

喘ぎすぎてかすれた声を上げ、何度目とも判らぬ絶頂に追い上げられて仰け反る咲妃の爆乳には、ケルベロスの両肩に生えた二つの首が食らい付いて噛み責めと搾乳を続けている。

凶暴な牙を白く光らせる獣の顎あごが、ガフッ、ガフッ、と荒い鼻息を漏らしつつ、たわわ

な乳肉を噛み責め、幅広でざらついた舌が、勃起乳首を容赦なく舐め転がして母乳の噴出を強要した。

「んああああ！ 出るッ……出りゆううンッ！」

舌をもつれさせて叫ぶ退魔少女の乳首がビクビクと脈動し、熱く甘い乳汁を、プシイイッ！ プチュルルッ！ と噴水の様に射出する。

ガフッ、ガフッ、ジュパッ、ジュロッ、ズジュルルッ、ビチャビチャビチャ、ジュパジュパジュパジュパッ……。

口内に噴き出る巫女の母乳を、魔犬の首がはしたない吸い音を立てて啜り込み、さらなる放出を強要するかの様に乳肉を噛んで圧迫する。

ギムムッ、ギムムギムムギムンッ！

巨大な犬歯が柔肉に食い込み、皮膚が傷つく一歩手前の力加減で責め立てて、爆乳の奥底から母乳を強引に搾り出す。

「つああああンッ！」

ぷしいいつ！ ぷちゆるるるつ！

過剰な肉感を誇る爆乳を獣の本能全開で食られた咲妃は、立て続けの搾乳絶頂を迎え、噴水の様に乳汁を迸らせた。

「コレダケ搾ッテモ、マダ涸レヌカ？ 我モ出スゾ！ 子壺ト尻デ、我ガ精汁ヲシカト受

「ケ止メヨ！」

射精を宣言した三本の獣根がひときわ硬く張り詰め、力強い脈動を開始する。

ビュクンッ！ ビュクビュクビュクドビュルルルルッ！ ドブドブドブズビュロロッ！ ビチャビチャビチャアアッ！！

「んひいひい〜ンンッ!!」

引きつった声を上げて悶絶する呪詛喰らい師の腔奥と腸奥に、犬神の濃厚な精液がぶちまけられ、素股責めしていた巨根から噴き出た熱汁が、粘液に濡れ光るボンデージ裸身を、新たな白濁でドロドロに汚す。

火傷しそうに熱い白濁獣汁が、搾乳責めを受け続けている爆乳の谷間を走り抜け、強烈すぎる中出し絶頂に歪む美貌に弾けた。

「……犯シ甲斐ノアル女体ヨ……我がココマデ昂ツタノハ、初メテノ事ヨ……」
数分間にわたって射精を続けた三本の巨根が、ゆつくりと引き抜かれてゆく。

グチュルッ……ズリヨッ……ジユポンッ！

徹底的に犯し抜かれても、可憐なたたずまいを崩さぬ腔口と肛門から、巨大な龟头が抜け落ちた。

「んはんっ！ あ……あはああ……ッ!？」

泣きそうな声を上げる咲妃の下腹がヒク付き、薄紅色の内壁を見せつける二穴から、大

量の中出しザーメンがドプツ、ドプツ、と溢れ出てくる。

「出……てるう……また、あああ、また、漏れ……てるう……」

悩ましげにかすれた声を上げる呪詛喰らい師の腔口からは、愛液と入り混じって薄められた白濁が腔筋の収縮の度に流れ出し、卑猥にヒクつく肛門からは、ゼリー状に凝り固まった獣液がズルズルと排泄されていた。

ビクツ、ビクンツ、と絶頂の余韻に痙攣しつつ、大量の白濁を溢れさせる咲妃の痴態を、三つ首の巨犬は赤く光る瞳で鑑賞している。

「く……はああ……ああああ……」

グッタリと脱力して喘ぐ咲妃の目は、焦点を失い、唇の端からは、喜悅の涎が溢れ出して、頬にこびり付いた精液と混じり合っている。

下腹が張り詰め、苦痛を感じる程大量の精液を注ぎ込まれては恥辱の排泄を強要され、再び犯されて中出しされるのを、何度も繰り返しているのだ。

許容量を超える快感を送り込まれ、数えきれぬ絶頂に襲われたせいで、時間の経過も薄れ、重力の感覚さえも失せていた。

「啞エロ！」

ヌチュ、ズチュルツッ！

獣の精液を滴らせる巨根が、体液まみれになった爆乳の谷間をくぐり抜けて、喘ぐ唇に

突きつけられた。

「あう……ウツ……くふうう」

むせ返るような獣臭が、度重なる絶頂で失神しかけていた咲妃の意識を強制的に覚醒させる。

「早クセヌカ！ ソノ淫ラナル口デ、我が摩羅ヲ吸ウノダ！」

「く……くふうう……んふ、ちゅっ、ちゅば、はうむふうう……ん」

三本並んだ巨根のうち、素股責めしていた真ん中の亀頭にキスした咲妃は、苦しげに眉をひそめながらも、凶暴な形状の先端部を咥え込み、舌を動かして奉仕した。

ぴちゃ、ぴちゃ、くちゅ、くちゅくちゅくちゅ、ちゅろちゅろちゅるるっ……。

赤黒く張り詰めた亀頭の表面を、艶やかなピンクの舌が縦横に這い回り、附着した精液を丹念に舐め取ってゆく。

（舌が火傷してしまいそうに熱い……それにものすごい臭いと味。だが、神伽を成し遂げるまでは、どんな汚辱にも耐えてみせる！）

頑強な精神を持った神伽の巫女は、獣臭と性臭を煮詰めたような汚怪おかいな怒張に唇を吸い付かせ、しなやかな舌を絡ませて、大神へのフェラ奉仕に没頭する。

「んふ、あふ、んっ、はふ……」

ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ、ちゅばちゅばちゅばじゅるるっ……。

呪詛喰らい師の唇を捲れ返らせて、喉奥まで突き挿れられる。

ズリッ、ギユムルッ、グニユルッ、ズリッ、ズリッ、グリグリグリンッ！

残る二本の巨根は、たわわな乳肉を突き廻り、まだ母乳を滴らせている勃起乳首に龟头を擦り付けて責め立てた。

巨根をめり込まされた爆乳が歪み、乳首から擦り出された母乳が巨大な龟头を白く濡らす。

ケルベロス型の淫神による、異形のパイズリフェラ強要だ。

「んむふううんっ！ んっんっんっんっ…ゴホッ！ ぐ…んぐうう…ッ！」

乳肉の内部まで犯された咲妃は、次第に激しくなるイラマチオに咳き込みながらも、必死に舌を使い、怒れる犬神に奉仕した。

「はふ、ちゅぱちゅぱちゅぱ、ちゆる…くふう…んっんっ、ぴちやぴちやぴちや」

巨大な龟头に舌をヌロヌロとまとわりつかせ、龟头冠に密生した肉瘤にくりゅうを一つ一つ丹念に舐め、先端の切れ込みから溢れ出る獣の精液を舌先で拭い取って飲み込んでゆく。

龟头をグリグリと押し付けられ、乳肉の奥深くに埋没させられてしまっている勃起乳首も、熱い乳汁をピュルピュルと噴き出し、残る二本の獣根に乳辱の快感を与えていた。

「乳肉マデ我ノ摩羅ヲ受ケ入レオルカ。淫ラナル身体ヨ…グルルウウウウ」

龟头のワレメに啞え込まれて突き廻られている勃起乳首が、尿道内にピュルピュルと射

乳する快感に、ケルベロスは心地よさげなうなり声を漏らし、さらに強く獣根を突き挿れる。
 (ああ……：亀頭が張り詰めて、味が濃くなってきた。また……：射精、するのか？ 大量に、口に出されてしまうのか……：全部、飲めるだろうか?)

喉奥まで突き刺さる亀頭がひときわ硬く張り詰めてくるのを感じた咲妃の胸中に、妖しい期待とかな不安が湧き起こる。

「巫女ヨ、我が精ヲ残ラズ飲ミ干セ！」

喉奥と爆乳に深々と突き込まれた獣根が、危険な脈動を開始した。

ドクンッ！ ドブリュリュリュリュリュッ！ ズビュロツズビュロツ、ドブドブドブド
 ビュロロロツ！

ゼリー状に凝り固まった濃厚な精汁が、呪詛喰らい師の爆乳に爆ぜ、食道を灼熱させて胃へと流し込まれてゆく。

「ふぐむううう！ んきゅふむううううんッ！ んく……：ゴクッ、ゴクッ、ゴクゴク
 ゴクンッ……！」

体液まみれの美貌を苦悶に歪めながらも、神伽の巫女ははしたなく喉を鳴らして口内射精された精液を飲み込んだ。

ドプッ、ドプッ、ドプッ、ズビュドロロオオオオッ！

驚く程大量の熱く獣臭い体液が、内臓全体を淫熱に火照らせて注ぎ込まれる。

楽しんで言いながら、ローター挿入は続く。

「わあ、どんどん入ってく……」

「もしかして、ここにあるローターが全部入っちゃうんじゃないの？」

提出したローターの大半が咲妃の膣内に次々に飲み込まれてゆくのを見やりながら、少女たちは興奮した口調で囁き交わしている。

「くあ……あふううう……もつ、もう入らない……寮長、こつ、これ以上は、むっ、無理！
んああんッ！」

卵形の責め具に膣内を満たされた呪詛喰らい師は、洗濯ばさみが食い付いた爆乳を震わせ、アナルプラグに繋がった尻尾をヒクヒクとしゃくり上げさせて哀願する。

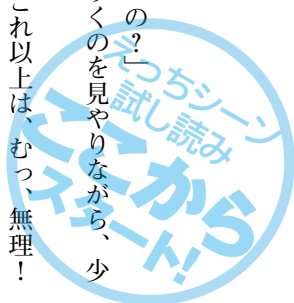
「うーん、確かに、もう入らないみたいね。ここで打ち止めよ」

何度押し込んでも、膣口からニュルリと排出されてくるローターを受け止めた寮長は、咲妃の秘部から伸び出た何本ものコードを束ね、その端に付いているコントローラーを、革帯ボンデージの退魔装束に次々と挟み込んでゆく。

「んは……あふう……な、何を？」

尻穴を占拠したアナルプラグと、膣内に目一杯詰め込まれたローターが薄い粘膜壁越しにグリグリとせめぎ合う感触に呻きながら、神伽の巫女は問いかける。

「コードを引きずったままじゃ、お散歩の邪魔になるでしょう？ はい、準備完了したわ。



降りなさい」

首輪に繋がった鎖が引かれ、咲妃はテーブルから引きずり下ろされた。

「その恰好で、この室内を一周するのよ♪」

事も無げに言い放った寮長は、鎖を引いて歩き始める。

「あ、あうう、あ、くうううん」

切なげに鼻を鳴らしながらも、従うしかない神伽の巫女は、ボンデージ裸身をエロチックにくねらせて這う。

「ひあ！ なっ、中で、擦れて……」

四つん這いで進む度に、膣内を満たしたローターたちがギユリギユリと擦れ合い、子宮口やGスポットなどの性感ポイントを圧迫してきて、膣奥に狂おしい快感が溜め込まれてゆく。

「寮長先生。せっかく挿れたのに、ローター振動させないんですか？」

少女の一人が余計なことを言う。

「そういえば、スイッチを入れるのを忘れていたわ。教えてくれてありがとう……」

サディステイックな笑みを浮かべた女性が、パチンツ！ と指を鳴らすと、全てのローターが一斉に動き始めた。

ヴヴウウウウンツ、ビビビビビビイイイイッ！ ギユゴゴゴゴゴッ！

「ひぐウツ！ しつ、神気でスイッチを!! うあ、あああああッ！」

突如、膣内で始まったローターたちの饗宴きょうえんに、引きつった悲鳴を上げて身悶えてしまう呪詛喰らい師。

犬神の舌で性感を燃え立たせられ、巨根で散々擦り嬲られて限界まで感度を増した膣粘膜を、ローターの無慈悲な振動がわななかせる。

ビビビビビビビイイイイイイイ〜ンッ！

粘膜から膣筋へと伝わった振動は、快感神経を根こそぎ搔き鳴らし、痺れるような快感電流が背筋を貫いて頭の天辺まで駆け上ってきた。

「んあ！ あああああつっ！ 中ッ、中が…：震えて、痺れて…：くああンッ！」

もはや言うどころではない呪詛喰らい師は、床に這いつくばったまま、ガクンッ、ガクンッ！ と尻をぎこちなく上下させ、深紅の革帯ボンデージに彩られた裸身全体をくねらせてよがり乱れてしまう。

ヴビビビビビビビッ、ウインウインウインブブブブウウウ〜ンッ！

「ふああ、うくううんっ！ あ、ああ…：くううんっ！」

振動の強度やリズムも様々な、モーター内蔵の小球しょうきゅうが、熱く潤み蕩けた媚粘膜を震わせ、快感神経を荒々しく搔き鳴らして、神伽の巫女に煩悶を強いた。

しなやかな肢体が込み上げる女悦に抗うかのように悶え揺らぎ、尻尾付きアナルプラグ

を挿入された豊かなヒップが複雑な軌道を描いて打ち振られる。

そんなことをしても、ローターの容赦ない快感は和らぐはずもなく、それどころかますます性感が強まってしまふ。

「ひぐうううんっ！ やああ、イクッ、イクッ、イク……んううううんッ！」

一分と保たず、咲妃は絶頂へと追い上げられ、甲高く裏返った嬌声を談話室内に響かせた。ふしっ！ ふじゆるっ！ ふしゅっ、ぷちゆるっ！

前のめりに突っ伏したボンデージ裸身がビクッ、ビクッ、ビクンッ！ と派手に痙攣し、コードの束を咥え込んだ秘裂の奥から、白濁した愛液が迸ほとばしって床を汚す。

絶頂が伝わったアナルプラグの末端で、疑似生物化した尻尾が、ピンッ！ と勃起。ペニスの様にそそり勃ってプルプルと震えていた。

「きやはあ！ イッてる！ この子、絶頂してるよ」

「すっごい反応。マジイキって、あんなになっちゃうんだ……」

絶頂する咲妃を取り囲んだ少女たちが、頬を染め、瞳を欲情に潤ませて声を上げる。

「あらあら、淫らな咲妃ちゃんは、ローターがよっほどお気に召したみたいね。あなたのお汁で汚した床を綺麗にしなさい」

「んあ……はう……んむ……ぴちや、ぴちや、く……くふうううッ！ あふ、ンッ、ぴちや、ぴちや、ちゆるっ……」

犬神憑きの寮長に命じられ、絶頂の余韻に痺れた身体を気怠げに反転させた咲妃は、不快げに眉を寄せながらも、床に飛び散った濃厚な愛液を舐め取ってゆく。

「うあわ、これは引くわあ〜」

「犬でも、自分の愛液舐めたりなんてしないよね？ 咲妃ちゃんってマジ淫獣〜♪」

女子たちが投げかけてくる蔑みの声を聞きながら、床を舐め終えた咲妃は、苦行の散歩を再開した。

「はう……んうううう、アツ、あああ、くううううンツ！」

切なげに目を細めて呻きながら、四つん這いのボンデージ裸身を這わせてゆく呪詛喰らい師。

ムツチリと張り詰めた太腿は、膣口から溢れ出す愛液で、オイルを塗ったように濡れ光り、重々しく揺れる爆乳の先端には、洗濯ばさみが食い付いて、勃起乳首を痛悦感で貫いている。

膣内ではローターの饗宴が続き、アナルに唾え込んだプラグも存在感を増して直腸壁を圧迫していて、少しでも気を抜けば、立て続けの絶頂を迎えてしまいうさだ。

「そこで一旦止まりなさい。咲妃ちゃんはお散歩中の牝犬なんだから、やるべきことがあるでしょう？」

談話室の隅までやって来たところで、寮長が声を掛けてきた。

「えっ？ なっ、何を!? アッ、ああああッ!」

膀胱が疼き、尿道がキューンッと鋭い尿意に襲われる。

(これは……さつき飲まされた精液の神気が……尿に!)

それもおそらく淫神の策なのだろう。

大量に飲まされた獣液に含まれていた神気が尿に変じ、恥辱の排泄を促しているのだ。

「オシッコ、するのよ。これから何をするのか、みんなに説明してから出しなさい」

ニヤリ、と獣じみた笑みを浮かべ、犬神憑きの女が命じる。

「オシッコだって……」

「しちやうのかな?」

「DMな常磐城さんだったらやるでしょ、マジで」

寮生の少女たちが投げかけてくる蔑みの視線と声を浴びながらも、咲妃は狂おしい排泄

欲求に抗っていた。

「どっ、どうかそれだけはゆるしてください。んあ……あ……んくううんッ!」

膀胱内でどんどん高まる尿圧を受けて、チリチリと疼く尿道を必死に引き締めながら、

神伽の巫女は哀願する。

「ダメよ。早くオシッコなさい!」

(犬神様の魂胆が読めてきたぞ。私の尿で、えんみけっかい厭魅結界を形成するつもりなんだな!)

淫神の意図を察し、美貌を強ばらせる咲妃。

犬神がやろうとしているのは、邪法を用いた結界形成術であった。

本来であれば、清めの塩や注連縄しめなわを使って張る結界を、咲妃自身の排泄物によって形成させることで、何らかの邪悪な効果を生み出そうとしているのだ。

（目的は、おそらく、私の子宮に施された封印の結界を弱め、破ること。それだけは、何としても防ぎたいが……ああ、耐えられないッ！）

「何をガマンしてるの？ さつさとオシッコなさい！」

込み上げる尿意に抗う咲妃に焦れた犬神憑きの寮長は、きつい口調で命じてくる。

「寮長先生、これ、咲妃ちゃんの躰けに使ってください。学園祭の劇で使った鞭です」
寮生の一人が、ビニール紐でできた鞭を持ちだしてきた。

「あら、ありがとう。早速使わせていただくわ」

ニヤリ、と野獣じみた笑みを浮かべた寮長は、鞭を受け取ると、右手でひと扱きする。

「う……クッ！」

深紅の炎のような、攻撃的な神気が鞭を覆うのを見た咲妃の喉奥から、絶望的な呻きが漏れた。

「咲妃ちゃん、お仕置きよ！」

軽く振りかぶった鞭が、尿意を堪える呪詛カースイーター師イの尻に振り下ろされた。

パシインッ！ ピシヤアアンッ！

軽い音を立てて、オモチャのような作りの鞭が尻たぶを連続して打つ。

「つあああッ！ はあああッ！」

鞭打たれた咲妃の喉奥から漏れたのは、エロチックに潤んだ嬌声であった。

（鞭に込められた神気が……身体の奥底まで響いて……感じてしまうッ！）

尻に打ち下ろされる鞭が与える痛みは、さほど強いものではなかったが、一撃ごとに快感神経が荒々しく掻き鳴らされ、全身がマゾ的な喜悦に痺れてしまう。

「うわあ、あの子、鞭で叩かれて悦んじゃってる。超マゾじゃん！」

「先生、お尻だけじゃなくって、あの生意気におつきいオッパイも叩いてください」

「ええ。いいわよ。覚悟なさい！」

理性のブレーキを外された女子たちのサディスティックなリクエストに応え、爆乳も鞭打たれた。

パチイイインッ！ パシンッ！ パンッ、パンッ、パンッ！

中身のたつぷりと詰まった肉果が、鞭の打撃を受けてブルブルと重々しく打ち震える。

「ふうわああんっ！ あっあッあああんっ！」

尻と爆乳を交互に鞭打たれた咲妃は、四つん這いになったボンデージ裸身を振らせ、堪らぬ声を室内に響かせてよがり悶えてしまう。

白い燐光りんこうを放っているかのような尻と、勃起乳首を洗濯ばさみに食い付かれたままの爆乳に、鞭の痕が薄紅色に浮き出し、ただでさえ色気過剰な咲妃の裸身を、倒錯とうさくてき的なエロスで飾り立ててゆく。

「くあ、あああう……もつ、もう、ガマン……できない……見ないでくれ、みんな、お願いだから……見ないで……」

尿意に耐えかねた呪詛喰らい師は、涙目になり、声を震わせる。

「おねだりの仕方が違うでしょ？ 淫乱マゾ牝犬なんだから、みんなによく見てもらえるようにお願いしてからオシッコしなさい」

鞭痕を刻印され、艶やかな赤に染まった尻を鞭の柄で撻りながら、寮長は命じる。

「くうう……んううう……オシッコ、します。みんな、私がオシッコするところを、見てくれ……ンッ、う……んああッ！」

気が遠くなりそうな尿意に屈した呪詛喰らい師は、恥じらいに震える声で女子たちに哀願しつつ、肉感的な太腿を掲げ、牝犬の排尿ポーズを取った。

剥き出しになった秘部に寮生たちの無遠慮な視線が集中してくるのを感じながら、下腹の筋肉を力ませ、排尿を開始する。

ぶしっ！ ちよろろっ、しゃばああああーッ！

ローターのコード束を啞え込まされた膣口のすぐ上、ツンと慎ましやかにすぼまってい

た尿道口が丸く開き、放物線を描いて尿水が迸った。

きらめきながら排泄された呪詛喰らい師の尿は、部屋の隅の柱と壁に飛沫を散らし、ムワツ、と甘ったるい芳香混じりの湯気を立ちのぼらせる。

「んは……はああああんツ」

犬のポーズで排尿を続ける咲妃の顔に、安堵混じりの恍惚の表情が浮かぶ。

（気持ち……いい……ああ、こんなことで感じてしまっている……排尿しながら……イッてしまいそうだ）

被虐の快感にボンデージ裸身が震え、膣奥から溢れ出た愛液が、ローターのコードを伝ってポタポタと垂れ落ちてしまう。

「うわあ、ホントにオシッコしてる……マジ信じられない！」

「談話室がオシッコ臭くなっちゃうよお」

寮生たちが興奮しざわめく声を聞きながら、咲妃は恥辱の排尿を終え、ボンデージ裸身をブルブルツ！と震わせる。

「一杯出たわね。さあ、お散歩、続けましょうね？」

床にできた尿水溜まりを満足げに見下ろした女は、鎖を引いて歩き始めた。

「んっ！ く……ううう……」

唇を噛んで俯いた咲妃は、引かれるがままに恥辱の道行きを再開するしかない。

「はい、ここにもオシッコなさい。まだ、出し足りないでしょ？」

また、部屋の角に来たところで、強烈な尿意が湧き起こった。

急激に尿水を満たされた膀胱が妖しい切迫感に包まれ、排尿の余韻に熱く疼く尿道がプルプルと震える。

「く……ううう……ンッ！」

アナルプラグに装着された尻尾を揺らし、切なげに裸身をくねらせて尿意に耐える呪詛喰らい師。

「まだガマンするの？ 強情な牝犬ね！」

パシイインッ！ ピシャアアンッ！

先ほどよりも強い力で、尻が鞭打たれ、神気を伴った衝撃が、尿水ではち切れそうな膀胱を直撃した。

「くああああんっ！ アッ、あああ、漏れるっ、うあああ、みっ、見ないでくれえ」

半泣きの声を上げて煩悶しながらも、呪詛喰らい師は前のめりに突っ伏して尻を突き上げた体勢のまま、二度目の排尿を開始してしまう。

ぷしいっ、ぷっしやあああゝッ！ しゃばばああああゝッ！

先ほどあれだけ出したというのに、今度の排泄も大量であった。

ローターのコードを啜え込んだ秘裂の奥から迸った尿水は、内腿をびしょ濡れにし、床

に熱い飛沫を散らす。

「はああああ、ああああンッ！」

熱い尿水が尿道を駆け抜けて迸る恥辱の放出快感に、咲妃の美貌がだらしなく歪む。

「うっそお！ まだあんなに出るの？」

「もお信じられない。あの子のこと、これからはドM牝犬って呼ぼうよ」

「オシッコ咲妃ちゃんていいんじゃない。オシッコ咲妃ちゃん、勢い余ってウンチしちゃダメだよ〜♪」

「アナルに栓してあるから大丈夫じゃない？」

引き締まった下腹の筋肉を波打たせ、恥辱に顔を歪めながら放尿する咲妃に、少女たちの声が投げつけられる。

「余韻に浸ってないで、這いなさい。まだあと二カ所、残ってるのよ！」

恥辱の散歩行為で、部屋の四隅に大量放尿させられた呪詛喰らい師は、談話室の真ん中に連れてこられた。

（身体が動かない!? 厭魅結界の効果、想像していた以上に強力だな）

部屋の真ん中に這いつくばったボンデージ裸身は、自分の意思ではピクリとも動かさない。

「咲妃ちゃん、その淫らな身体の奥に、まだ隠しているモノがあるでしょう？」

「え？ ま、まさか!」

ギクツ！ と顔を強ばらせる咲妃に、犬神憑きの寮長は犬歯を剥き出しにして、ニヤリ、と邪悪に微笑みかける。

「私に犯されている間も隠し続けてきた敏感で恥ずかしいモノを、今、みんなの目の前で引きずり出してあげるわ……」

「くあ、あああッ！」

呪詛喰らい師カリスライターの身体を背後から抱きかかえ、膝立ちの姿勢を強要した寮長は、股間に指を滑り込ませてクリトリスを弄り始めた。

きゅむっ、くりっ、くりっ、ぐりぐりぐりぐりっ！

ローターのコードを咥え込んだピンクの秘裂の頂点で、キュンッ！ と硬く尖り勃った敏感な肉芽に、魔犬のオーラをまとわせた指が舞い踊る。

「ひゃあうんっ！ んあ！ あっあッあうううッ！」

「フフッ。こんなに硬くして、いけない子……でも、この淫らな突起は、もつと硬く大きくなるわよね？」

サデイスティックな笑みを浮かべて囁きかけつつ、細くたおやかな指が最も敏感な突起を摘まみ、包皮を剥き上げて荒々しく責め弄る。

ムギユウッ、クリッ、クリクリグリグリグリンッ！

親指と人差し指の間に挟み込まれたピンクパールのような突起が、ギチギチと圧迫されながら、左右に激しく揉み廻られた。

「うわあ、寮長先生、大胆……」

「あんなの見せられたら、アタシのアソコもムズムズしてきちゃうよお」

勃起を強要されたクリトリスがグリグリと荒っぽく揉み転がされる様子を食い入るように見つめながら、少女たちは身体の奥底から込み上げてくる淫らな疼きに身を振らせている。

「咲妃ちゃん、気持ちいいでしょう？ 素股責めされた時は、必死に耐えていたわよね？ でも、今度は許してあげないわよ……」

仰け反り悶える咲妃の耳元に囁きかけながら、淫神の依り代となった女は、敏感すぎる突起に容赦のない責めを加えてくる。

「あはああああ！ やはあんっ！ そっ、そんなにされたら……きゅふううんッ！」

神気を放つ指に摘まみ揉まれたピンクの肉芽は、たちまちのうちに勃起を強め、クリトリスのサイズを超えてムクムクと膨張してゆく。

「みんな、よく見なさい。この女は、こんなに淫らなモノを身体の奥に隠し持っていたのよ！」

亀頭サイズに膨らんだ勃起陰核をきつく摘まみ、思いつきり引っ張られた。

ズリユツ！ ずにゆるんっ！

咲妃の身体の中から、見事に反り返ったフタナリペニスが引きずり出される。

「くあああああ〜ンンツッ！」

ペニス型の淫神である淫ノ根いんのねを強引に引きずり出された神伽の巫女は、甲高く裏返った悲鳴を上げて仰け反ってしまふ。

元がクリトリスであったとは思えぬ程雄々しくそそり勃った美少女の勃起は、粘液に濡れ光る艶やかなピンク色の肉茎を強ばらせ、紅色の亀頭を張り詰めさせて、ビクンビクンとしやくり上げている。

「えっ!? えええーっ！」

「うわあ、チンポ出てきたあ！」

理性を緩められてはいても、さすがにこれは想定外の出来事だったらしく、少女たちがひとときわ大きくざわめいた。

「そうよ。咲妃は、女なのにこんな凶悪なモノを隠し持っている淫らで邪悪な生き物なの。これで、あなたたちを犯そうとしていたのよ」

美少女の勃起に寮長の指がヌルリと絡みつき、手コキ責めを開始した。

シウルツ、キュムツ、シウルシウルシウル、ニユクニユクニユクツ……。

魔犬の口と同じ能力を持った指が咲妃のフタナリペニスを握り、巧みな愛撫で快感を送

り込んでくる。

「ひあ！ あっあつアツ、あ……くはあああんツ！」

勃起を締めつけた指の輪が上下に滑り、張り詰めた亀頭を指の腹で執拗に擦り立てられる快感に、苦悶と歓喜の入り混じった声を上げて身を振る呪詛カリスイ喰らい師。

ペニスを責められているというのに、その声は女っぽい艶めかしさをさらに増し、甘い震えを交えて室内に響く。

「この邪悪なモノは、私がしつかりお仕置きしてあげるから、あなたたちが犯される心配はないわよ……。あら、まだ硬くなるの？ それにヌルヌルのお汁も一杯出てきたわねでも、もっとヌルヌルにしてあげる」

仰け反った咲妃の喉元に舌を這わせながら、サディスティックな響きを帯びた声で言った寮長は、テーブルに置いてあったローションを掌に垂らしてこね回し、神気を練り込んでゆく。

「一杯擦ってあげるわ。覚悟しなさい」

神気の込められたローションにぬめった指が勃起に絡みつき、上下に滑り始めた。

ヌチャツ、ヌチュヌチュヌチュ、ヌチヌチヌクヌクチュルツ。

「ひああうんっ！ あはあ、あ……あああ……やはあああんツ！」

ヌルヌルの指でフタナリペニスを抜き廻られた咲妃は、自由にならぬ裸身を狂おしげに

振らせ、壮絶な快感に喘ぎ乱れてしまう。

「うわあ、寮長先生、チンポ弄り上手い……」

「何だか気持ちよさそう……」

ペニス責めに悶える呪詛喰らい師の痴態を食い入るように見つめながら、寮生の少女たちも込み上げる淫情を抑え切れず身を振らせている。

「気持ちいいでしょう？ この敏感な摩羅が、責めにどこまで耐えられるかしらね？」

咲妃の全身から匂い立つ、甘い発情臭を胸一杯に吸い込んで堪能しつつ、寮長はペニス責めに熱を込めた。

先端の切れ込みから溢れ出す愛液を指の腹ですくい取り、ローションと混ぜ合わせて勃起全体に塗り込みながら手淫責めのストロークを早めてゆく。

又チツ、又チツ、クチュクチュクチュ、又チュ又チュ又チュルツ……。

絶え間ない粘音を立てながら、魔性の指が勃起を締めつけ、ペニスを屈服させようと激しく上下する。

「くあ！ あああ、あひッ！ ンツ……くふうううンツ！」

硬く反り返った屹立した肉胴を締めつけながら滑り上がってきた指の輪が、龟头冠を何度も逆撫でし、親指の腹が、先走りを嘖きこぼすワレメに強く押し付けられてグリグリと擦り責める。

圧迫快感に襲われた美少女の勃起は、ビクビクと絶え間なく痙攣して、犬神憑きの寮長を楽しませた。

「本当に敏感なのね？ 根元の方を責めたら、男と女、両方を感じさせることができそうね？」

龟头責めから一転して、根元まで滑り降りた指先で、男女の性器の合わせ目を揉み弄り、喜悅の呻きと共に二種類の愛液を搾り出す。

「ひあ！ あぐうううんっ！ うあ、あつあつんはあああゝんっ！」

ペニスの強張りとは、秘裂の蕩け肉の接合部を、ムニムニ、グリグリと押し廻された呪詛喰らい師は、悩ましげな声を上げ、膝立ち状態で金縛りになったボンデージ裸身をわななかせせる。

「咲妃ちゃんカリスライターの摩羅、張り詰めて震えてきたわ。みんなに見られながら責められるのが気持ちいいなんて、本当に淫らなのね？」

完全に主導権を握った犬神憑きの女は、言葉責めで羞恥を煽りつつ、掌に龟头を包み込み、ローリングして責め立てた。

ヌチャヌチャヌチャヌチャヌチャッ！

先端部を握り込んで寮長の拳が卑猥な音を立てて旋回し、大量に溢れ出したガマン汁が艶めかしいピンク色に充血した勃起の胴をトロトロと伝い落ちて秘裂に流れ込む。

秘裂から溢れ出した愛液と混じり合って量を増した先走りの粘液は、膝立ちになった咲妃の太腿を伝い流れ、床に滴り落ちてゆく。

「くはあ！ あ……ああああ……クウンンンッ！」

トロトロに濡れた敏感な先端部を摩擦責めされた呪詛喰らい師は、泣き笑いのような表情を浮かべ、射精への階段を一步一步確実に昇らされていたが、間一髪の所で踏みとどまっている。

「すぐに弾けてしまうかと思ったけれど、意外と耐えるわね……もう少しハードに責めた方がいいのかしら？」

手コキ責めに抵抗し続ける強情なペニスを弄り回しながら、寮長はテーブルの上に置かれたオナニーグッズを物色した。

「それじゃ、これを使って、内側も責めてみようかしら？」

彼女が目を付けたのは、普通の綿棒よりも長く、先端部が太い、メイク用の綿棒だ。

(?! あんなモノを今、挿れられたら……)

危機感に身を強ばらせる咲妃のペニスに、ローションを塗りたくった綿棒が近づいてきた。

「行くわよ。一杯いい声で鳴きなさい」

ヌプッ……ヌププププッ！

ペニス先端の敏感なワレメに、大型の綿棒がゆつくりと挿入されてゆく。

ローションをたっぷりと含ませた綿が、細い粘膜管をこじ開け、奥へ、奥へと潜り込んでくる。

「ひああうんっ！ くあ……いつ、挿れたら……はああああうううッ！」

引きつった声を上げて仰け反る咲妃のフタナリ勃起に、10センチ以上の長さがある綿棒の軸が深々と挿入された。

「意外とあっさり入ったわね。中にモノを挿れられるのは、初めてじゃないようね？ それなら、遠慮なく犯してあげるわ！」

ヌプププツ、ヌプニユプニユプヌリユリユツ！

寮長の指に摘ままれた綿棒が緩やかに旋回しつつストロークして、射精経路を内側から犯す。

「くはあ……あふっ、ンツンツンツ、くうううん……」

膣を犯される快感と似てはいるが、それよりもさらに鮮烈で狂おしいペニス内ピストンの刺激に、フタナリ巫女は色っぽい声を上げて仰け反ってしまう。

「どこが感じるのかしらね？ この辺り？ それとも、もつと奥の方かしら？」

ペニスの芯を犯す綿棒が、浅く、深く、探るように抜き挿しされ、禁断の領域を探る。

「この辺りの深さが一番感じるみたいね。ほおら、捻って上げるわ」

最も強く激しくペニスに反応するポイントを見つけ出した寮長は、綿棒の軸を摘まんだ指を振って責め立てた。

ヌリユツ、ヌチツ、ギユル、ギユリルルツ……。

ローションと先走り汁にぬめった綿棒の先端が、粘膜の細管を巻き込みながら、左右に捻られた。

「ひいんッ！ うはあ……くあ……あはああんッ！」

精液が通過するだけでも感じてしまう敏感な粘膜管の内部を掻き回されたフタナリ巫女は、堪らなく悩ましげな声を上げ、金縛り状態のボンデージ裸身を痙攣させる。

「中と外、同時に虐めてあげる……」

綿棒をストロークさせながら、寮長は反対側の手指を勃起の胴に絡め、リズムカルに扱き立て、さらに強烈な快感を美少女の勃起に送り込む。

ニユプ、ニユプニユプチュプ、クチュクチュクチュ……。

射精経路を犯されながら、ツボを心得た執拗な手コキ責めを受けた咲妃のフタナリペニスは、ビクビクと絶え間ない痙攣を強いられ、射精への螺旋階段を駆け昇ってゆく。

「ほおら、咲妃ちゃん、あなたの恥ずかしい姿、女子たちが見ているわよ」

犬神憑きによって秘められていた性癖を解放された寮長は、言葉責めで咲妃の羞恥を煽る。

「う……ああ、見られ……てる……みつ、見ないで……ああンッ！ そんな目で、みるなあ……きゅふううンッ！」

寮生の少女たちは、咲妃の哀願を無視して、自分たちにはない器官を責められてよがり悶える咲妃の痴態を瞬きすらも忘れて見つめている。

「くあ……ああああ……出る。射精……してしまっ！」

容赦のない責めに屈したフタナリ勃起が硬度を強め、切羽詰まった痙攣が張り詰めた肉茎を震わせた。

「ダメよ！ まだ、出してはダメ！」

チュポンッ！

あと数秒責め続けられたら弾けてしまう、というタイミングで、ペニスに絡んだ指がスツ、と離れ、尿道を犯していた綿棒も抜かれてしまう。

「えっ!? アッ、あああンッ！」

切なげな声を上げた咲妃は、はち切れそうに張り詰めた勃起で宙を突いて、カクカクと空腰を使ってしまう。

綿棒に犯されていた亀頭のワレメからは、大量のガマン汁が溢れ出し、部屋の明かりを反射して、きらめく糸を引いて舞い散った。

「浅ましく腰を使って……淫らなチンポ牝犬ね！」

射精寸前で寸止めした寮長は、指に付着した体液をネットリと舐め取って味わいながら、メガネのレンズ越しにフタナリ美少女を見下ろして、蔑みの声を掛けてくる。

「く……んううう」

爆発寸前の状態のまま放置された勃起をヒクヒクとしゃくり上げながら、神伽の巫女は唇を噛んで俯いてしまう。

否定の声を上げられないことが、咲妃の追い詰められた心情を無言で物語っていた。

射精寸前でお預けを食わされたペニスの根元奥では、呪詛カリスライター喰らい師の強靱な精神さえも蝕むような、狂おしい放出欲求がグルグルと渦巻いているのだ。

「そんなに射精したいのなら、とどめは寮生みんなに刺してもらいなさい」

ビクビクとしゃくり上げるフタナリペニスを、固唾を吞んで見守っていた少女たちに視線を向けた女は、サラリと言い放った。

「えーっ、やだよ、そんなことできるわけないじゃん！」

「射精したら、白くて臭いドロドロが出るんでしょ？ あんなの身体にかけられたら、臭いが取れなくなっちゃいそう……」

犬神の支配下にある少女たちの反応は冷ややかであった。

「そうだ、これ使いなよ！ 綿棒よりも効くと思うよ」

フタナリペニスをヒクつかせて煩悶する咲妃に差し出されたのは、テーブルに置いてあ

った電動歯ブラシであった。

「え？　それで、何を？」

「これをチンポに突っ込んでオナニーして見せてよ」

咲妃の質問に、ニヤリ、とサディスティックに微笑んだ少女は、とんでもない要求を突きつけてきた。

「そつ、そんなもの、入るわけないだろう！？」

「このままじゃ無理かも知れないけど、こうすれば……ね？」

先端の歯ブラシ部分を外すと、直径数ミリの金属軸が姿を現した。

「いいわね、咲妃ちゃん、これでオナニーして射精しなさい」

金縛り状態で動けなかった両手が勝手に動き、電動歯ブラシを受け取った。

（手が操られている!!　他の連中が見たら、私が自発的にオナニーしているように見えてしまう……）

抵抗しようとする意思とは裏腹に、操られた左手はペニスを握って角度を調整し、右手に持った電動歯ブラシが先端のワレメにジワジワと近づいてくる。

チュプ……ズプププッ!

「くあ……あはあああううう……」

綿棒ストロークの余韻に疼くペニスの芯に、細い金属棒が潜り込んでくる異様な快感に、

悩ましげな声が漏れてしまう。

「入れるだけじゃダメでしょ？ スイッチを入れなさい」

「や……やああ……振動なんてしたら……」

抵抗の声を絞り出す呪詛喰らい師の指が勝手に動き、スイッチを押ししてしまう。

ウイイイイイイイイイッ！

ローターよりも振幅の細かい振動が、電動歯ブラシの金属棒を震わせ、フタナリペニスの敏感な粘膜管を内部から責め立てた。

「あひんっ！ うあ……あ。アッ、あああんっ！」

高速ヴァイブレーションの刺激で勃起全体をビリビリと痺れさせられた咲妃は、切れ切れの声を上げ、膝立ち状態で金縛りになったボンデージ裸身をガクガクと震わせてよがり乱れる。

「効いているみたいね。左手がお留守になってるわよ、さつき私がしてあげたみたいに、しっかり握ってオナニーしなさい」

寮長の命令を待っていたかのように、ペニスを握っていた左手が、上下の手淫ストロークを開始した。

ヌチャヌチャヌチャヌチャヌチャ……ウイイイイイイイイッ。

「ひあああうんっ！ あはああんっ、やつ、いつ、ヒッ、きゅふうううんっ！」

ローションと先走りのミックス粘液に濡れた美少女の勃起が扱き立てられる淫音に、電動歯ブラシのくぐもったモーター音が混じり、それに咲妃の上げる艶めかしい声が混じって、淫らなハーモニーを奏でる。

「わぁ、すごく激しくシコシコしてる」

「きつと、いつもああやってオナニーしてるんだよ。いやらしい……」

少女たちが興奮と侮蔑の混じり合った様子で言い交わす声を聞きながら、神伽の巫女は焦れた様子でボンデージ裸身を振らせる。

電動歯ブラシの振動は確かに強烈ではあったが、金属棒が短すぎて、欲しい部分に刺激が届いていないのだ。

（奥……もつと奥に……くうううんッ！）

膝立ちの体勢を崩し、ペタン、と床に女の子座りした咲妃は、アナルプラグを咥え込んだ尻と、幾つものローターを挿入された秘部を冷たい床板にムニユムニユと押し付けて自慰行為を強めてしまう。

「ふはぁう、あんッ！ あ、あふうううんっ！」

床でひしゃげた豊臀が卑猥なグラインドを見せつけて揺らぐと、尻尾付きアナルプラグが、ローターに満たされた膣壁を間接的に圧迫し、ペニスの根元奥にある性感スポットを、卵形責め具の振動がビリビリと刺激する。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



呪詛喰らい師

カースイーター

シリーズ

蒼井村正

挿絵 / 或十せねか



全国の書店・電子書籍サイトにて発売中!



「正義のヒロイン姦獄ファイル」
「敗北乙女エクスタシー」にて
コミカライズ連載中!
※不定期連載です。

原作：Rusty Soul
作画：或十せねか
原案：蒼井村正

二次元ぷち文庫 電子書籍でしか読めない!
ドキドキ★ラブ!

呪詛喰らい師外伝

シリーズ

夏祭り封神譚

餓神乳辱 前編・後編

淫女神の森 前編・後編

蒼井村正

表紙イラスト：或十せねか

好評配信中!

